

平成二年四月二十二日（日）

郷土研究会資料

第一七四回 史跡めぐり資料

甲州街道 四谷・新宿を訪ねて

越谷市郷土研究会

第一七四回 史跡めぐり資料

とき 平成二年四月二十二日(日)

集合 越谷駅前 午前八時三〇分

コース 越谷駅―北千住駅―銀座駅―四谷駅―

新宿歴史博物館―全勝寺(山県大弐墓)

―新宿御苑

昼食 ……新宿御苑内(予定)

太宗寺(江戸六地蔵・エンマ堂他)―

正受院―成覚寺(旭地蔵・恋川春町墓)

―天龍寺(時の鐘)―新宿駅―武蔵浦和

駅―南越谷駅……解散

案内者 山田 政信

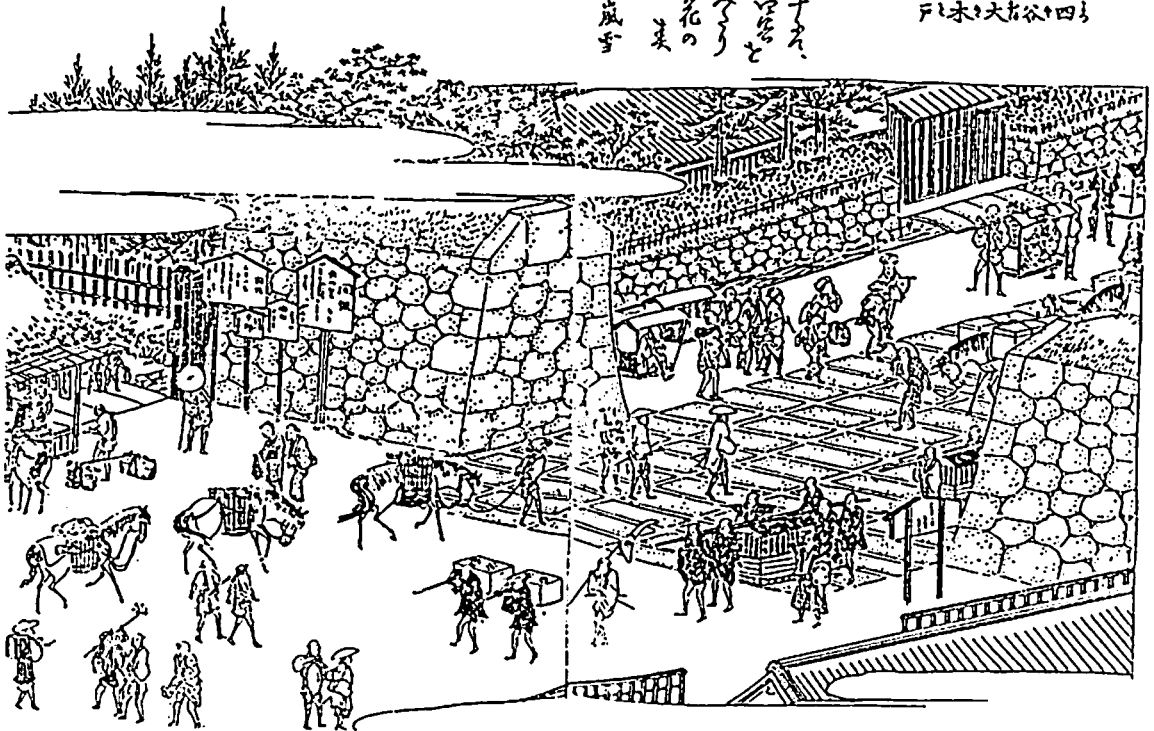
会費 金二五〇〇円

(交通費・拝観料・資料代他)

主催 越谷市郷土研究会

四谷大弐の墓

三十一、
四谷と
花の
ま
蔵寺



江戸新町

〔内藤新宿〕

「江戸名所図会」に、甲州街道の官駅なり。（この地は、旧内藤家の第宅^テなりしが、後町屋となる。故に名となす。）日本橋より高井土までの行程、凡そ四里余りにして、人馬共に勞す。依って元禄の頃この地の土人官府に訴へて、新たに駅舎を取立つる。故に新宿の名あり。然りといへども、故有りて享保の始め廢亡せしが、又明和九年壬辰再び公許を得て駅舎を再興し、今は繁昌の地となれり。（この所より高井戸へ一里二十五町あり。）追分というは、同所甲州街道、八王子通及青梅等への分道なればなり。とある。

（内藤宿）

家康が江戸幕府を開いた翌慶長六年（一六〇一）に、東海道・中山道・日光道・奥州道・甲州道の五街道が開かれた。ほかの街道の第一宿駅までの道のりが、それぞれ二里余であったのに対し、甲州街道は第一の宿駅の高井戸まで四里余もあり、旅人や荷馬車が不便を感じていた。いつ頃か、太宗寺の門前に数軒の茶店が開れた。街道筋にあたることから、旅人が立ち寄って疲れをなおしていたが、この町屋は住民の願いにより、寛永二年（一六二五）には公認された。この場所が内藤大和守の拝領地だったところから、後に内藤宿と呼ばれた。

(内藤新宿)

元禄十一年(一六九八)、浅草阿部川町の名主、高松喜兵衛ほか四名の町人が、ここに新しい宿場の設立を願ひ出た。幕府は、五千六百両を上納することを条件に、許可を与えることにして、内藤氏から九千六百余坪を返上させた。

喜兵衛は名を喜六と改めて内藤新宿の名主となり、太宗寺を中心として街道の両側に町屋を建て、自らは本陣を經營した。高松家は代々この名主を勤めた。初代喜六の基は、若葉町の愛染院にある。なお、内藤新宿とは、前の内藤宿に対して新しい宿場。または内藤家の旧拝領地内の新しい宿場、という意味で呼ばれるようになった。

(宿駅の廃駅)

しかし、享保三年(一七一八)、廃駅を命ぜられた。それは、四谷に住む放本、内藤新五郎の弟が内藤新宿の飯盛女と喧嘩になり、地元の若い衆と争つた。兄は弟に切腹を命じ、その首を大目付・松平図書守に差し出し宿場の取りつぶしを強訴した。幕府は喧嘩両成敗ということで宿駅を廃止したというのである。しかし、本当の原因は、飯盛女の強引な客引きで、風紀の乱れたためとの見方もあるようである。

(宿駅の再興)

その後、享保七年、八年の二度にわたって、再開を願出たが許可されず、半世紀後の明和九年(一七七二)、やっと再開した。請願者は五代目高松喜六で、許可の条件は、年貢十六兩一分、権利金年百五十五兩でこのとき旅籠五十二軒、飯盛女百五十人を置くことが認可された。

再開許可の表向きの理由は、街道往来の増加によって、宿場の必要性が高かったことであるが、同年田沼意次が老中に就任しているところから、彼の商業振興政策と、賄賂政治にも関係があったと思われる。

江戸時代の宿場内は、大木戸方面から下宿・中宿・上宿の順に呼ばれていた。これが今の新宿一丁目二丁目・三丁目に引き継がれたのである。



江戸名所図会

〔全勝寺〕

雄峰山全勝寺は、岩槻の曹洞宗常泉寺の末寺。天正六年（一五七八）麴町貝塚に創立したときは竜源寺と称した。天和二年（一六一六）牛込に転じ、同年五月四谷に移ってきた。

（山県大貳の墓）

全勝寺には、幕末の勤王思想家山県大貳の墓がある。大貳は甲斐の出身、名は昌貞号を柳莊、通称を大貳といった。甲府で与力をしていたが、故あって職を離れ、江戸に出て私塾を開いた。

宝暦九年（一七五九）「柳子新論」で、尊王倒幕を説いたため、幕府に目をつけられ、明和三年（一七六六）逮捕され、翌年同志と共に死罪となった。

安本直弘氏の四谷散歩によると、処刑後、大貳の首は、水戸の里方の処に、胴体は四谷に、頭髮は郷里、山梨県竜王の山県神社に、それぞれ葬られた。とある。四谷の墓は、全徳寺の庵寺によって、隣にあった全勝寺に引き継がれたものである。

〔新宿御苑〕

新宿御苑の敷地は、徳川家康の家臣、内藤清成が天正十八年（一五九〇）に拝領した中屋敷の一部である。庭内にいくつかの池や滝があり、武蔵野の樹木が生い繁って、山や谷のある名園であった。

明治五年、内藤家は、渋谷川以西の土地を政府に上納したので、大蔵省の所管となり、同十年、農産関係の内藤新宿試験場となった。

明治九年、農事修学所を開き、全国から生徒を募集し農学研究を始めた。しかし、当時宿場街だった内藤新宿は風紀上好ましくなかったの
で、修学施設は目黒の駒場に移され、東大農学部の前身となった。

明治十二年からは皇室用地として宮内省所屬となり、「植物御苑」と名前が変ったが、果樹等の栽培研究が行われた。明治二十六年、日本最初の本格的な西洋温室が建設され、熱帯植物等の栽培研究も行われるようになった。

日本庭園やフランス庭園、イギリス式自然風景園の整備も進み、明治三十九年五月、明治天皇を迎えて開園式が行われた。それ以降、ここは「新宿御苑」と名づけられ、皇室のバレス・ガーデンとなった。一般に公開されたのは、戦後、昭和二十四年になってからである。



新宿御苑玉藻の池

〔太宗寺〕

「江戸名所図会」によると、内藤新宿右側中程、大木戸より二丁余りに有り。浄土宗にして……本尊は阿弥陀如来にして恵心僧都の作。開山念菩故心学玄和尚と号す。昔わづかなる草庵なりしを、寛永の頃内藤大和守重頼この地を賜はりし時、この地に住める道心者ありしに、重頼シヨバク千の地を与へられしがふるろツ広縁なるをもって太宗なりと云ひしかば、重頼とりあへず、さあらんには寺号を太宗と付けよ、とありしより号となす。とある。

内藤清成がこの地を拝領したとき、ここに小庵があつて太宗という僧が住んでいた。この僧は代々内藤家の法要を行っていたが、内藤氏五代重頼のとき、七千余坪の敷地を寄進して太宗寺を開いたとされている。山号を霞関山、院号を本覚院という。（四谷散歩より）

境内のエンマ像と脱衣婆像、それに江戸六地藏の二つである金銅地藏像は有名となり、内藤新宿の名所となつた。

（江戸六地藏）

銅仏丈六尺座蔵なり。享保の始深川の沙門地藏坊正元造立する所なり。

一番	品川	品川寺	(東海道)	宝永五年(一七〇八)
二番	四谷	太宗寺	(甲州街道)	正徳二年(一七一二)
三番	巣鴨	真性寺	(中山道)	正徳四年(一七一四)
四番	山谷	東禅寺	(奥州街道)	宝永七年(一七一〇)
五番	深川	靈巖寺	(千葉街道)	享保二年(一七一七)
六番	深川	永代寺	(水戸街道)	享保五年(一七二〇)

宝永から正徳の頃、深川に地蔵坊正元という行者がいた。自分が生命の危機から救われた報恩のため、江戸周囲の街道筋六ヵ所に地蔵を造って、人々の後生と天下泰平を祈ろうとする悲願を立てた。正元は江戸市内を回って寄進を募り、十四年かかって、この六地蔵を完成させた。

(エンマ堂)

このエンマ像は、文化十一年(一八一四)の作で、江戸最大のものといわれている。高さは約五メートルあり、像の体内には「嘉永二乙酉巳月一九日淨財修補二代目」と墨書きしてある。

このエンマ像については、いくつかの説話がある。即ち

「つけひもエンマ」「エンマの眼玉」「能面師の源太郎の作」などである。

左手の脱衣婆像は、明治三年の作で、新しいが、女性の無情、強欲、憎悪を象徴した写実的な作である。

〔成覚寺〕

成覚寺は、浄土宗で十劫山曇寿院と号している。創立は文禄三年（一五九四）で、別名「投げ込み寺」と呼ばれている。

この名のいわれは、新吉原の「投げ込み寺」三の輪の淨閑寺と同様、内藤新宿遊郭の遊女が死ぬと、米俵にくるまれて投げ込まれたといわれる。その数はこの寺だけで、二千二百体に上ったという。

境内の中央には、地蔵に取り囲まれた無縁塔がある。これは天保八年（一八三七）、内藤新宿の侠客三河屋大助が、無縁になった遊女たちの霊を慰めるために建てたものである。周囲にある地蔵尊は、死んだ遊女の親や、同僚たちが置いたものである。

（旭地蔵）

この地蔵尊は、寛政十二年（一八〇〇）甲州街道から新宿四丁目天龍寺に向かう道の、玉川上水の橋のたもとに建てられたもので、明治十三年、道路拡張のためここに移された。「三界万霊」と刻まれた台座の上に、十八人の戒名を記した台石があり、その上に地蔵尊が安置されている。この地蔵尊は、玉川上水へ入水した者の霊を慰めるため建てられたもので、台石の戒名は、寛政十二年から文化十年まで男女七組と、男三人、女一人で、情死者はほとんど新宿の遊女と、これに同情した客であろう。

春町は延享元年(一七四四)、紀州徳川家に仕える。桑島九蔵勝義の次男に生れる。宝暦十二年(一七六二)、松平丹後守(駿河小島藩一万石)の家臣で伯父にあたる、倉橋忠蔵勝政の養子となった。翌年には出仕し、明和八年(一七七七)十四二人扶持の刀番に任ぜられた。本名は倉橋格、通称半人といい、後に寿平と改めた。江戸後期の戯作者で、黄表紙の創始者であり、狂歌師や浮世絵師も兼ねるといふ、多芸の持主として知られている。

春町は、はじめ絵師志望で、洒落本のさし絵などを描いたこともあったが、安永四年(一七七五)、出世作『金々先生栄花夢』キンケン先生栄花夢を出版して、一躍有名になった。その後寛政元年(一七八九)『夢窓返文武二道』イムカハカエシノチノウツリニテを出版した。しかしこれは老中松平定信の寛政改革を批判したものととして、当局の取締をうけそうになったため、自殺したとも召還を拒んで病死したとも伝えられている。

墓の左側面に、『生涯苦楽四十六年即今却浩然帰天』と刻まれ、「我れも万た、身はなきものと思いが、今はのきははさ比しかりけり」の辞世も残している。

この他境内には、内藤新宿の繁栄にかくれた悲しい女性たちをしのぶ「子供合埋碑」、鈴木主水と内藤新宿橋本屋の飯盛女白糸との悲恋物語の「白糸塚」、などがある。



四谷散歩

恋川春町の肖像
(狂歌名・洒上不持)

〔天龍寺〕

「江戸名所図会」によると、追分より南の方、甲州街道の左にあり。本尊千手観音。開山は春屋和尚なり。宝徳元年（一四四九）の創立という。当寺、その先は遠州の天龍川の辺にありしを、後江戸に遷し牛込にありしが、天和三年癸亥二月十六日火災にかかり、ついにこの地に引かれたり。

牛込時代には、江戸城表鬼門を鎮護する上野寛永寺に対し、裏鬼門を護る寺とされていた。当時の住職には十萬石待遇の格式が与えられ、江戸城内の祈願行事に招かれるのを常とした。

境内の鐘楼には、高さ一・五メートル、直径八十五センチほどの梵鐘がある。江戸時代、上野や浅草の鐘と同様、時刻を知らせる鐘の一つで、上野寛永寺・市谷八幡と並んで江戸三名鐘の一つといわれた。

この鐘は明和四年（一七六七）天龍寺を菩提所としていた牧野備後守（常陸笠岡八萬石）が発起人となり、一般から寄付を求めて造ったものである。銅の混入量が多いため、音の響きがよいといわれている。作者は多摩郡谷保村（今の国立市）の鋳造師関孫兵衛である。

江戸の時の鐘は八カ所あって、明け六つと暮六つに打っていた。ところが新宿は江戸城より遠いため、武士が登城に間に合うよう、明けの鐘は四半時（三十分）早く打つようにしていたのである。このため、新宿遊廓に遊ぶ客にとっては、ほかより三十分早く追い出されるため「追い出しの鐘」と呼ばれていた。

この寺の山門は、天龍寺第三十八世慈恩賢孝が建てたもので、昭和十二年から六年かけて完成した。「将来、オリンピックが開かれたら外国の人に見てもらおう」と、昭和の始めから計画を練っていたもので、幸いに戦災を免れた。

（四谷散歩より）

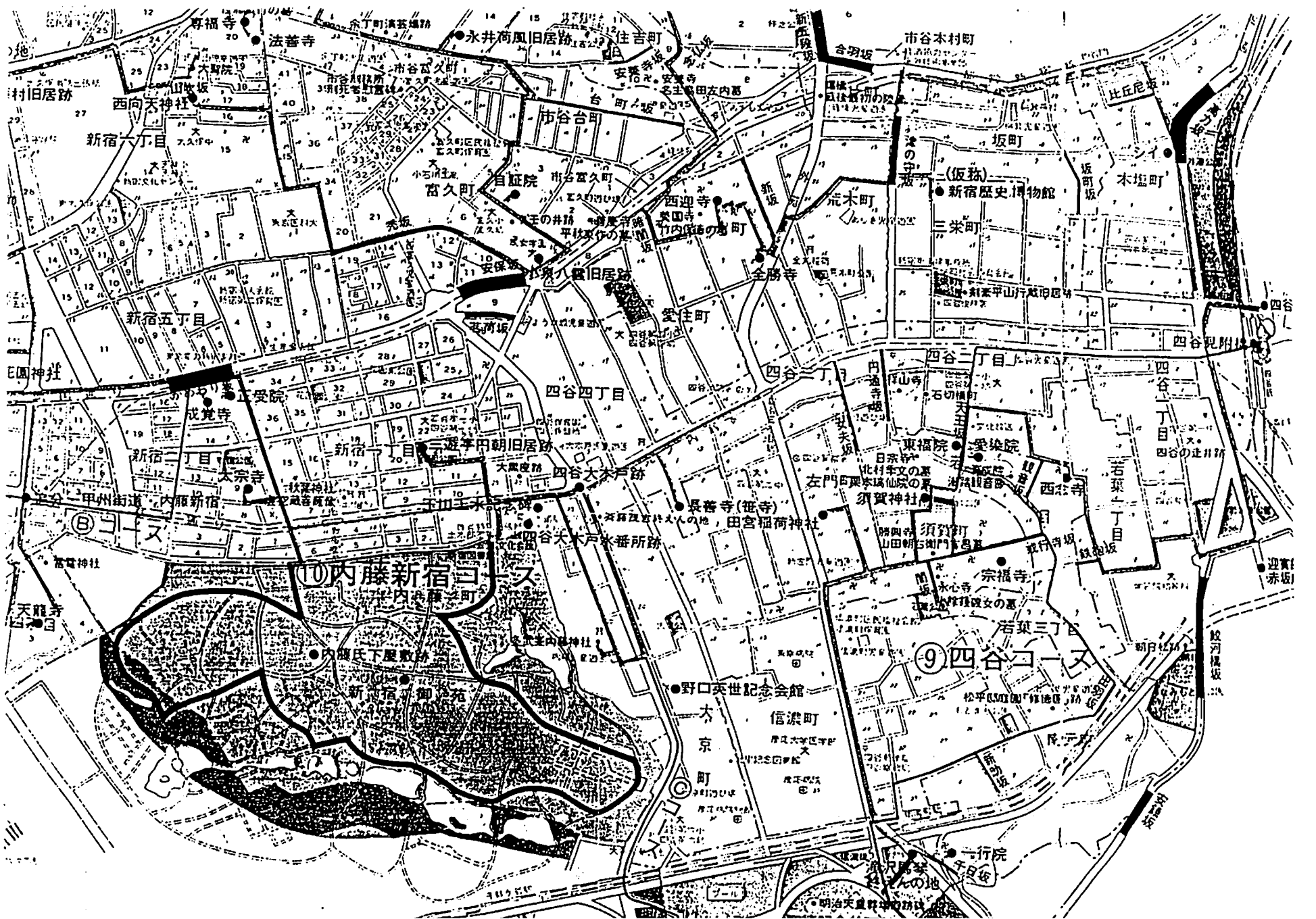
門を入ってすぐ右側に脱衣婆堂があり、中に六十センチあまりの脱衣婆の木像が安置されている。脱衣婆とは、仏教の三途の川の渡し守で、亡者を捕えて着物をはぎ、地獄へ送り込む役割を持っている。

像は文化年間（一八一八―三〇）ここに納められたものらしいが、最初のうちはせき止めにご利益があるということで、信者が集った。嘉永二年（一八四九）には諸願に靈驗あらたかということで信者が絶えず、線香の煙が四谷見附までたなびいたほどの流行神となった。この時の盛況をしのばせる石造の百度石が本堂前におかれておる。

和裁の無形文化財、小見外次郎翁の胸像がある。毎年二月の針供養がこの碑を中心に盛大に挙行されている。正受院で針供養が行われるようになったのは、脱衣婆にせきとめを祈願する人が真綿を奉納したことから、裁縫の神様となり、そのため針を供えることになったという。

参考図書

- | | |
|---------------|----------|
| 新版江戸名所図会 | （株）角川書店 |
| 東都歳事記（東洋文庫） | （株）平凡社 |
| 四谷散歩 | （株）みくに書房 |
| ガイドブック新宿の文化財 | 新宿区教育委員会 |
| 歴史と旅（平成二年三月号） | （株）秋田書店 |



専福寺
法善寺

永井荷風旧居跡

市谷本村町

比丘尼坂

木場町

(仮称)
新宿歴史博物館

市谷台町

新宿一丁目

富久町

西迎寺

荒木町

新宿五丁目

四谷四丁目

四谷二丁目

四谷一丁目

新宿二丁目

新宿三丁目

四谷大戸跡

東福院

愛染院

甲州街道

内藤新宿

四谷大戸水番所跡

具善寺(僅寺)

左門

須賀神社

西光寺

⑧コース

⑩内藤新宿コース

⑨四谷コース

野口英世記念会館

大京町

信濃町

若菜三丁目

一行院

明治天皇御幸跡